

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫



◆◆◆ No.0512 ◆◆◆

18/12/05

【 干支やラッキーカラーから、来年の動静を考える 】

名実ともに12月入りし、今年もついに残り1カ月をきった。そこで今回の当レターでは、いささか早い気もしないではないが、ここ数年恒例化している「干支やラッキーカラー」などの視点から、来年の為替を中心とした金融市場の見通しについて、レポートしてみたい。

<< 干支とラッキーカラー >>

干支、いわゆる十二支というものには、それぞれラッキーカラーが存在している。たとえば、一昨年「申(サル)」は、「赤が運氣の上がる色」とされ、続く昨年は今年「酉(トリ)」年は連続となる「赤」そして「白(一部で白に近い黄色との見方も)」になるーと言われていた。そうしたなか、野球においては「赤ヘル軍団」の広島カープの活躍、赤の兜が美しかったNHKドラマ「真田丸」が大人気となったことなどは記憶に新しい。

そんな干支とラッキーカラーからすると、今年の干支は「戌(いぬ)」で、そのラッキーカラーは「オレンジ」「ピンク」「黄色」「ゴールド」ーとされていた。

それを踏まえ、相場との関係性を考えた場合、「ゴールド」を中心とした貴金属にチャンスがありそうだと思うのだが、年間を通して値動きはいまひとつ。ただ、もうひとつ取り上げていた「原油相場」については、足もところそ冴えないものの、年明けから大きく上昇し10月初旬にWTIが80ドル台後半の高値を付けたこともあり、「半分程度当たった」と言えるかもしれない。

さて、そうしたなか、肝心の来年のラッキーカラーだが、干支は「亥(い=いのしし)」で、「ゴールド」や「シルバー」など光物系のほか、「白」や「グレー」といった逆に落ち着きのある色が指摘されている。前述したように、「オレンジ」「ピンク」「黄色」といったようなカラフルな色が指摘されていた今年から、一転して地味目な色が来年は幸運を呼ぶ公算が大きいようだ。

なお、来年のラッキーカラーを踏まえた金融市場の商品を考えると、「不動産」投資などが取り上げられている。飽くまでも、ラッキーカラーによる観点であり、「当たるも八卦当たらぬも八卦」という程度の認識で頭に留めておきたい。

<< 末尾に「9」のつく年 >>

今年と同じ西暦で末尾に「8」がつかう年を調べてみたところ、ニュースなどでは特別興味深い事象は観測されなかったが、ドル/円相場が大荒れの傾向を示すことが多い。変動相場制以降、過去4回の「末尾8年」を見てみると1988年を除く、残り3回はすべてかなりの「大相場」だった。

そんな経験則もあり、今年の相場にける期待感は非常に大きなものだったが、結果はまだ確定していないとはいえ、ご承知のとおり。日経新聞が懸念した「変動相場制、年間を通した最小変動幅」が現実のものになろうとしている。

それを踏まえたうえで、来年である「末尾に9がつかう年」を過去に遡って調べてみると、なかなか大きな事件が起こっている。一例を挙げると、「英名誉革命とその後の権利章典(1689年)」「フランス人権宣言(1789年)」のように、その多くは欧州に。しかも、ドイツに関しての「事件」がことさらに付く結果となった。後者のドイツに関しても幾つか具体例を指摘すれば「ワイマール憲法制定(1919年)」「第二次世界大戦のキッカケとされる、ナチスドイツによるポーランド侵攻(1939年)」「ベルリンの壁崩壊(1989年)」「首都がボンからベルリンに移る(1999年)」ーなどとなる。折しも、足もとがメルケル政権の地盤が揺らいでいるような状況にあるだけに、来年のドイツ情勢は気掛かりかもしれない。

一方、それとは別に中国についても「末尾9の年」は深い因果が存在している。たとえば、「いわゆる中華人民共和国建国(1949年)」や「天安門事件(1989年)」などで、それらを含めて、世界情勢が何かと波乱の多い年が「末尾9の年」と言えそうだ。

最後に、過去4回の「末尾9の年」の為替市場、ドル/円相場の動きを見てみると、過去すべてが過去の平均変動率を上回る「大相場」。また、方向性は別にして、比較的一方向に動くことが多いのも、特徴のひとつ

